

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

貴重図書の閲覧と公開

情報サービス課閲覧第二掛長 湯 本 智 子

1. はじめに

ここに東北大学見学会の一環として図書館を訪れた高校生の感想文をいくつか紹介してみたい。

「…特に図書館では、膨大な蔵書の数に大変驚き、夏目漱石の自筆の原稿などを見せていただいた時は、ただただすごい一言につきるという感じでした。」

「…個人で集めた十万冊以上の本や何百年も昔の絵、夏目漱石の下書きがあって博物館のようでした。」

「…二つ目の館の方に入って、夏目漱石の資料を見て感動しました。小説の原稿や、はがきや、こずかい帳や、お金の貸借帳など…。日常に少し触れられた感じがしました。」

これらは山形県立山形西高校二年女子生徒の感想文で、図書館へ後日送られたものである。特に、貴重書展示室を見学した時の印象について書いた箇所を抜粋した。素朴ではあるが一様に新鮮な感動を述べており、東北大学入学への原動力の一助となれば、図書館員としてうれしい限りである。



本学の貴重書はリクエストに応じて、全国の研究者の閲覧に供されるとともに、本学を訪れた多くの大学関係者、高校生、一般市民

等に対して展覧されており、毎年数点は各地で行われる展示会への出陳など広く公開されている。これらの業務は、図書館業務の重要な部分として積極的に行っているにもかかわらず、地味なサービスとして捉えられており、貴重書の存在すら学内でも充分には知られていない。本学の貴重書が、いかに機能的に活躍しているかを、その閲覧と管理を担当する閲覧第二掛のデータに基づいて、紹介してみたいと思う。

2. 貴重図書とは

東北大学附属図書館は、長い歴史の中で国民的財産ともいえるべき貴重な資料の収集・保管を行ってきた。膨大な蔵書の中から、貴重図書等指定基準によってより分けられた約4500点が、2号館4階の書庫に貴重書として別置されている。貴重図書の指定基準は、和書については刊本、写本ともに慶長年間以前(1614年)に印刷又は書写されたものとされている。1615年以後のものでも伝本が少なく資料的価値が高いと認められるものは、貴重書と指定される。洋書については、1600年にアンダーラインを置いているが、1601年以後の資料的価値が高いと認められるものもかなり多く收藏される。そして、和洋ともに名家自筆の稿本及び書簡、書入れ本も貴重図書の指定基準となっている。

貴重書庫には、ハロンガスによる消火設備が設置され、書架に設置された調湿ボードによって防湿対策が講じられ、管理の面できめ細かな配慮がなされている。しかし、管理と保管にのみ心を砕いて貴重書庫の奥深く資料を閉ざすことは、決してない。

3. 貴重書の利用状況

閲覧に際しては、「貴重図書閲覧申請書」の提出を必要とする。助手、院生、学生及び学外者の閲覧には本学の講師以上の教官が保証人となることを原則としている。但し、本学教官に保証を得られない学外の研究者につ

いては、その所属機関長の保証と研究業績等の申告によっても、特別に閲覧を認める。

平成5年度から平成6年10月までにおける貴重書の閲覧者数と利用冊数は、図1)のとおりである。

図1-1 平成5年度貴重書閲覧者及び閲覧冊数

身分 資料	学 内 者				学 外 者						計	
	教 官		学 生		教 官		学 生		そ の 他			
貴 重 書	2人	8冊	0人	2冊	12人	732冊	7人	9冊	4人	20冊	25人	771冊
漱石文庫	3	4	2	2	34	307	6	82	4	396	49	791
計	5	12	2	4	46	1,039	13	91	8	416	74	1,562

図1-2 平成6年4～10月貴重書閲覧者及び閲覧冊数

身分 資料	学 内 者				学 外 者						計	
	教 官		学 生		教 官		学 生		そ の 他			
貴 重 書	3人	6冊	5人	9冊	15人	147冊	0人	0冊	7人	10冊	30人	172冊
漱石文庫	0	0	7	50	49	300	3	77	6	70	65	497
計	3	6	12	59	64	447	3	77	13	80	95	669

上記の数字は職員が貴重書庫内より提供した貴重書を実際に手で触れて閲覧した利用者数と冊数であって、常設展示及び書庫内のみの見学者は一律に含まれていない。図が示すように、学外者の利用が圧倒的に多い。人数に比べて利用冊数が多いのは、数日滞在して閲覧する利用者が多いからである。特に漱石文庫閲覧の場合は、そのおびただしい資料の量から到底一日だけで閲覧するのは難しい。遠方より来館した研究者の方々が、「東北大学の方は居ながらにして、これらの資料を見られるのがうらやましいです。」と、しばしば言われる由縁である。

貴重書の場合、電子複写は認められていないことから、利用者の殆どは撮影の申請をする場合が多い。簡便なカメラでさらに撮影技

術に習熟していない利用者の場合、失敗するケースが多く、気の毒である。狩野文庫の和書については、マイクロフィルムが完成しておりフィルムで代替できるものは、原資料を提供せずマイクロフィルムの閲覧をお願いしている。利用者区分の中でその他に属するのは、展示会、市史や町史編纂、出版等の事前調査の為に訪れた学芸員、編集者、地方公共団体職員等である。また最近では、職業に関係なく個人的な研究課題を追求して閲覧する方も見られ、まさに生涯学習時代であることを感じさせられる。

東北大学附属図書館では、これまで和漢書古典分類目録、別置本目録、特殊文庫目録シリーズを刊行し、これらの二次資料を全国の大学図書館に寄贈している事もあって、利用

者は閲覧を希望する資料の請求記号を正確にメモしてくる等の事前調査が完璧である。そのため資料を提供する立場としては、大変効率の良いサービスが行える。このことは、紛失事故等を防止するための管理には、当然のことながら万全を期さなければならぬ事をも意味する。

目録の中でも、昭和56年に作成された漱石文庫目録は今なお非常に需要が多い。現在は在庫がなく、他大学の希望者には相互利用掛を通しての複写をお願いしている。この漱石文庫目録は、図書のリストについては完璧だが、自筆資料類のリストは完全に収録されているという状態ではない。これ程要求度の高い実情から考えて、漱石文庫目録の再編集が今後の、しかも早急の課題といえる。

4. 漱石文庫の利用

貴重書の利用を述べる時、漱石文庫を特筆しない訳にはいかない。それ程閲覧と見学の希望が多いからである。前掲したデータから利用される貴重書の中で、漱石文庫の占める割合が多いのが容易に読み取れる。

漱石文庫の経緯や内容等については、これまでに本学の先生や先輩方がさまざまな紙面で紹介してこられた。そして多くの漱石研究者がその論文上において或は参考文献上で本学所蔵の名を記載している。マスコミを通して夏目漱石は、幾度となく取り上げられており、日常一般的に我々が目にする最も親しみやすい文豪といえる。そして没後78年の今なお、漱石の研究は後を絶たない。

漱石文庫の中で、利用頻度の高い資料は次のとおりである。

1. 英国留学時代のノート
2. 修善寺大患日記（明治43年6月6日から10月7日までの日記）
3. Sudermann, H.
The Undying Past. (消えぬ過去)
London. 1906.

4. Bergson, H.
Time and Free Will. (時と自由意思)
London. 1910.

5. 貸した本のリスト

漱石文庫には蔵書への書き込みや日記帳、手帳類のように形をなす資料の外に、煩雑とも思える程のおびただしい量の一枚物の資料が存在する。一枚物といわれる資料の用紙の形態は、大学ノートに書いて一枚毎切り離したもののや身辺の手近な紙等、さまざまである。記述したものは総て保存する漱石の几帳面な性癖には、驚嘆すべきものがある。そしてその数は実に約1680枚に及ぶ。これらの資料の整理は、当時文学部村岡勇教授によりなされ、そのご努力と研究成果は「漱石資料—文学論ノート」（昭和51、岩波書店）として結実し、大部分は活字化されている。これらの一枚物資料は大型のファイル24冊に分けて収納されており、俗にアルバムと称している。その後、館内資料としての域は出ないが「漱石文庫アルバム収納資料目録」により、整理保管されている。

上記利用頻度の高い資料の(1)はこのアルバムの中の一冊であって、活字化されている部分もあるのだが、原資料への閲覧希望が多い。この事は俗に蠅頭の字といわれる程の細かい字を通して、英国留学時代に神経衰弱に陥った漱石の精神状態を想像するという作業が、活字を通してでは難しい事を物語っている。

(2)のように日記、手帳の体裁をとどめる資料は15冊存在する。その多くに日常の様子を記録する日記としての機能の外、彼の主要な作品の構想が綿密にメモされている。漱石の文学作品を論ずる研究者にとっては、必見の資料といわれる由縁である。その外、日記や手帳には俳句や漢詩、デッサンやスケッチ等も描かれている。(2)は胃病を患った時の闘病日記で「苦痛一字を書く能わず」等病苦に耐える様子が記されている。

(3)と(4)は漱石が所蔵していた約3,000冊の蔵書の中の2冊である。その多くに通読したと思われる書き込みがある。

(3)は、「驚嘆の外なし。大作なり、又傑作なり豊富なる想像と豊富なる理性を具する事かくの如きは羨むべし。万事に貧困なる吾等は之を手本とすべし」という書き込みがある。

(4)は漱石が思想的に大きな影響を受けたとされているフランスの哲学者 Henri Bergson の著書である。Bergson は1927年にノーベル文学賞をうけている。

これらの蔵書への書込みも、大部分は岩波書店「漱石全集」に「蔵書の余白に記入されたる短評並びに雑感」として活字化されている。

(5)の貸した本のリストは、漱石が他人に本を貸した際の覚え書で狩野文庫の狩野亨吉などさまざまな人物の名前が記されている。これまで種々の出版物に写真で紹介されている。

これらの自筆資料は鉛筆書が多いので、繰り返しの閲覧を伴う時間の経過の中で、損耗が容易に予想される。この事は全国の漱石研究者が一同に、懸念している事である。東北大学に移された昭和19年より、50年を経過した現在、マイクロ化やフォトレジスト化等の対策を講じなければならない時期にきている。そして原資料を一日でも長く延命させる事が本学の義務といえる。

50年前、第二次大戦の混乱期の東京から、遠く東北の地にたどりついた漱石文庫は、今こうして本学の貴重書庫の中で手厚く守られ、多くの人々の閲覧に供されている。気難しい漱石もおそらく満足していることと思う。

5. 貴重書の公開と出陳

貴重書展示室には、常時約35点前後の貴重書が陳列されている。冒頭でも述べたように

各高校で企画する「東北大学見学会」の一環として訪れた高校生、或いは大学関係者や研究者の外に見学申請があれば一般の学外者に対しても、この展示室は公開される。見学者団体の主旨、身分等を考慮し、事前に展示物を検討し入れ替えているが、常時展示している何点かの貴重書は、保存の観点から同じ頁を固定しないよう、時々変える等の配慮をしている。平成5年度から6年にかけて常設展示の見学者数は約1930人であった。

また、貴重書は展示室内での公開のみならず、狩野文庫マイクロ化等の記念事業や部局が主催する学会に呼応して特別に一般公開される場合もある。昨年11月11日より5日間、AV室及びエントランスホールで催された「貴重図書公開展示会」には約二千人の入場があった。この展示会には、一般市民の外多くの東北大生が観覧したことからも、古典資料に接する機会を提供すれば興味のある学生が少なからずいると感じた。図書館では、入学時のオリエンテーションに際して「図書館利用案内」のビデオ放映により国宝や個人文庫の紹介を行っている。さらに、平成6年度より参考調査掛では新しい試みとして、オリエンテーションの一環に貴重書常設展示の見学を取り入れた。以前は、図書館の先輩方が定期的にあるテーマについての企画展を催していた記録がある。図書館組織も今ほど巨大化していなかったもので、職員の意思統一も容易であったろう。先輩方の築いてきた実績を、暫くは中断していたが、少しずつ復活させる試みは必要であると思う。日常業務の外に貴重書の展観を企画する事は確かに大変な労作であるが、一人でも多くの学生や留学生に対して貴重書に接する機会を作る事が図書館のサービスのひとつと思うからである。特に、留学生への貴重書見学の機会提供は、日本の文化と歴史の学習支援の意味で、国際貢献にもつながるのではないかと思う。

図2 平成5—6年度展示会出陳一覧

*印は貴重書

資 料 名	出 陳 先	展 示 会 名
*倉持文書（斯波兼頼書状）	最上義光歴史館 山形	「斯波と最上」
茶器名形編	仙台市博物館	「大名の精華—仙台伊達家の至宝」
*子規撰「七艸集」 （ななくさしゅう） *吾輩は猫である 序文原稿 *漱石の大学ノート （シンデレラの翻訳）	思文閣美術館 京都	「子規そして漱石へ」
煎茶式 松秀園書談	三重県立美術館	「江戸の風流才子・増山雪斎」
和漢三才図会 江都二色 盧生夢魂其前日 （ろせいかゆめそのぜんじつ） 万職図考	仙台市博物館	「遊び心、まわれ〜江戸ごまの粋」
*漱石文庫 58点	東京都近代文学博物館	「漱石火山脈展」
*青木正児編 北京風俗図譜	日中友好会館 東京	「中国の春節展1 剪紙 豊饒への悠久の祈り」
*妙法蓮華経巻八 金字経	京都国立博物館	「王朝の美」
菅井梅関筆 三界居録他6点	仙台市博物館	「孤高の画人 菅井梅関— 没後100年記念」
真澄遊覧記 第18, 28冊	仙台市博物館	「縄文人のいのり」
漫遊文草 巻三 倭訓栞（わくんのしおり） 國造本紀 *一目玉鉾（ひとめたまぼこ）	群馬県立歴史博物館	「日本三古碑は語る」
*臨顧愷之 女子箴図 （りんこがいし じょししんず）	山種美術館 東京	「前田青邨 —その人と芸術」
*筆満可勢（ふでまかせ） 法禁 仙台座芝居番附	仙台市博物館	「庶民の楽しみ 芝居の世界」
*小野隆庵 采摘艸木篇 （さいてきそうもく へん） 物産目録 草木葉	福島県立博物館	「げんき・病気・元気」展
*南小柿寧一 解剖存真図 山脇東洋 蔵志（ぞうし） 杉田立卿重 眼科新書 大槻玄沢 重訂解体新書 銅版全図 森島中良 萬國新話 紅毛雑話 司馬江漢画	秋田県角館町伝承館	「江戸の医科学展」

計94点

図2)は学外の展示会へ貸与した貴重書とその出陳先である。博物館や美術館の学芸員の方は、職業上当然の事ではあるが、その取り扱いや管理に対して非常に専門的なトレーニングを積んでいる。本学のように膨大な古典資料を収蔵する図書館の職員は、学芸員のような知識が必要であり、古典資料等の取り扱いの研修を、機会があれば受ける必要がある事を痛感する。附属図書館長期計画検討委員会でも、その報告に古文献担当職員の養成について言及しているので、この事は近い将来、実現すると思われる。

6. おわりに

閲覧者への貴重書の提供を通して、資料について、或は歴史的な事柄等について教えて頂く場合がある。例えば、漱石の門下生であり第15代図書館長でもあった小宮豊隆教授の生前を知る閲覧者の方から伺う話は、歴史的な重みを感じる。そして国文学研究資料館副

館長の松野教授からは、貴重書の裏打紙に思いもかけず貴重な資料が発見される場合があり、将来補修等をする場合注意すべき旨のご提言を頂いた。特に漱石文庫については、各大学の研究者や岩波書店の編集者の方に日常業務からは決して学習し得ない多くの事を教えていただいた。それは、とりもなおさず本学の貴重書を共に守っていこうとする暖かい思いにはかならないと感じられる。

ある学外の研究者の方が、「これらの宝は、東北大学のものであって、東北大学だけのものではない。しかし、このように行き届いた管理がされている東北大学に保管されているので、私達は安心です。心配り大変でしょうが、これからもよろしくお願いします。」という言葉を残していかれた。この言葉には、本学が貴重書を後世に伝えるための配慮は勿論のことであるが、共有財産であるという認識も忘れてならぬという意味がこめられているように思われる。(ゆもと・ともこ)



漱石文庫

J.M. Dixon 編 *Simpler English Poems* への書き入れ。1890年、24歳の時。Dixon は当時、帝国大学文科大学英文学科の外人教師であった。人物像は、漱石自身なのか Dixon を描いたものか不明。

附属図書館（本館）書庫改修・環境整備記念事業

本学待望の電動集密書架が平成6年4月に完成しました。書庫内資料再配置計画に基づく作業も順調に進み、使いやすく、検索しやすい機能的な書庫が誕生しました。また図書館周辺での植栽、照明、ベンチの整備等も行い身体障害者用のスロープ、エレベーターを新たに設置し、正面玄関の入口に自動ドア、自動入館システム装置も10月31日（月）から稼動しました。

利用者の皆様によりみじかに親しんでいただけるように図書館内外の整備を進めてまいりました。そこで東北大学図書館では大規模な電動集密書架の導入による書庫の改修及び館内外の環境整備完了を記念して次の行事を開催いたしましたのでご紹介いたします。

1. 記念披露式及び祝賀会の開催について

平成6年11月10日（木）東北大学附属図書館大会議室（2号館）において附属図書館（本館）書庫改修・環境整備記念披露式が午後4時から菊地和聖館長の挨拶に始まり西澤潤一総長が「本学図書館の貴重な文化遺産を守り世界に広めるよう努力してほしい」と挨拶がありました。文部省関係者及び招待者・本学教職員約100名が参加して盛大に行なわれました。引き続き電動集密書架ならびに貴重図書特別展示等を見ていただき利用者に適した

配置が十分になされた点に関心が持たれたようでした。

午後5時30分から祝賀会が始まり集まった方々から苦労話や図書館の歴史的経緯を語りながら昔話に思い出の花を咲かせました。終始会場内は和やかな雰囲気にも包まれていました。

2. 貴重図書公開展示会の開催について

平成6年11月11日（金）～15日（火）まで開館 午前9時～午後4時30分（土・日を含む）特別展示会を附属図書館（本館）正面玄関入口とA・V室を利用して一般公開しました。本展示会は当館が所蔵する江戸学の宝庫といわれる狩野亨吉博士のコレクション「狩野文庫」をはじめ夏目漱石の蔵書・自筆資料からなる「漱石文庫」、櫛田民蔵氏の蔵書、「櫛田文庫」、「西藏大蔵経」等数多くの著名なコレクション資料の中から国宝2点を含む約150点を精選展示しました。マスコミ関係の宣伝効果の影響もあったか教職員はもとより一般市民・他大学生・高校生等多数の入場者があり、大変な盛況でした。中には熱心にメモをとる方も見うけられ見学者からも定期的に展示会を開いてほしいとの感想も聞かれました。



このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

「ザンクト・ガレン修道院の文化」展の開催

来る11月22日（火）から12月10日（土）まで、本学文学部と附属図書館の主催で、図書館大視聴覚室を会場に表記展示会が開催された。

本展は、スイス文化財団プロ・ヘルヴェティア等の援助を受けて、ザンクト・ガレン修道院文書館長ヴェルナー・フォグラール博士が企画・構成し、1990年以来、欧米各地で開催され、好評を博した巡回展であり、日本では本学を含め5ヶ所で開かれる予定である。

スイス東北部に位置するザンクト・ガレンのベネディクト会修道院は8世紀に遡り、9世紀から11世紀にかけて黄金時代を迎え、学問と芸術の伝統を守り育成することにおいて

ヨーロッパで最も重要な修道院の一つとなった。とりわけ写本の制作と収蔵で有名である。その後、16世紀から18世紀にかけての第二の繁栄の時代に、バロック様式の修道院聖堂と修道院図書館が建造され、現存するこれらの建築群は修道院建築史上の傑作として、ユネスコの世界文化財に1983年指定された。

本展は、初期中世およびバロック期に輝かしかつたザンクト・ガレン修道院の文化活動の歴史を、その初めより1805年の修道院活動閉鎖に至るまでを通観しようとしたもので、わが国では直接目にすることができないヨーロッパの修道院図書館の事物に接する非常に得難い機会となった。



お知らせ

「狩野文庫マイクロ版」が利用できます

「東北大学附属図書館所蔵狩野文庫目録・和書之部」全11冊の出版完了、及び、マイクロリーダー・プリンターの導入により、「狩野文庫マイクロ版」の利用態勢が整いました。

「狩野文庫」については、資料保存の観点から平

成3年10月以来、電子複写による複製を制限してきましたが、今後は、マイクロ版からの複製が可能となりました。また、マイクロ版による閲覧もできますのでお知らせいたします。

平成6年度大学図書館職員長期研修に参加して

情報サービス課相互利用掛 南 館 義 孝

今年度の研修は連日の猛暑のなか、国公立大学総数45名（内女性19名）の中堅職員が参加して、7月18日から8月5日までの3週間に渡って行われた。研修の内容は第1週が図書館情報大学を会場にした講義中心のもの。第2週目が学術情報センターや東大・東工大・慶応三田メディアセンター・国会図書館・国文学研究資料館の見学及び講義。第3週が筑波大学での見学とレファレンスの実習、図書館情報大学での講義とグループ討議等であった。

今回の研修のなかで、特に感じたことは、大学図書館の役割の変化である。そのいくつかをあげると、第一に、ネットワークとマルチメディアによる情報の提供である。最近の社会における情報環境の変化が、学術情報の生産や提供の方法にも影響を与え、従来のような図書や雑誌による情報の提供だけでなく、多様な媒体を利用した情報の提供や、他大学及び海外諸機関の情報資源利用のためのネットワーク化への対応が求められている。

第二は、資料の収集・管理中心の運営から提供・利用中心の運営への移行である。情報媒体の変化にともない自館の情報資源の整備・提供だけでなく、ILL等による他大学資料の利用や国内外の情報資源利用のための仲介的役割への期待が増大している。

第三には、情報生産機能の拡大である。これからの図書館は所在情報の生産機能（データベース化）だけでなく、劣化資料や特殊コ

レクション、学内外で発生する情報資源のデータベース化が必要である。また、各種の情報資源を利用するための案内情報（ナビゲーションツール）の作成などを加えた電子図書館的機能の拡大が期待されている。

第四には、多様な利用者ニーズへの対応である。大学図書館の市民への開放が求められる一方で、休日や時間外開館の延長、新しい情報機器や快適な空間の提供など、利用者のニーズは益々拡大し多様化している。

このような大学図書館に対する、新たな役割への期待は、図書館そのものの在り方を問うものである。

アメリカの大学では、図書館が学術研究のための中心機関であり、多くの予算と人員を投入してその機能の向上と充実を図っており、研究者は学術情報の殆どを図書館システムにより得ている。反面、各研究者には資料を選択する権利や予算が殆ど無い状態である。

これからの大学図書館がどう在るべきかについては、各大学が図書館に何を求めているかによるわけであるが、我々図書館員も利用者との関係の中で考えていかなければならない課題である。

研修に際しては多くの方々に援助と協力を頂きました。ここで改めて感謝の意を表したいと思います。

（みなみだて・よしたか）

平成6年度 NACISIS-IR 地域講習会を受講して

情報サービス課参考調査掛 木 村 元 子

標記講習会が、学術情報センターと福島大学附属図書館との共催により平成6年8月30日～31日の2日間にわたり福島大学情報処理センターを会場として開催された。受講者は国・公・私立大学から19名である。

講習に先だち、福島大学樋口館長の挨拶、講師の紹介及び挨拶、受講者の自己紹介があった。

講習内容は、情報検索の手順、基本コマン

ドの使い方、応用検索、論理演算の組み立て方等の講義と端末を使つての実習である。講義は簡単明瞭かつ丁寧で初心者にも容易に理解できるものであった。講習は終始真剣な中にも、なごやかな雰囲気運ばれ充実した2日間であった。

最後に今回の講習会の関係者の方々に感謝を申し上げます。

(きむら・もとこ)

平成6年度東北大学附属図書館職員総合研修会

今年度の研修会は、築波大学芸術学系教授富江伸治氏と東洋大学工学部教授清澤文彌太氏をお迎えして、10月11日(火)の午後1時半より2号館会議室に於いて開催された。

はじめの清澤氏の講演は、VDT作業と健康障害について

- ① 画面上の文字表示やコントラストなど機器に関わる問題点
- ② 視線と画面の位置や作業姿勢
- ③ 部屋の明るさと作業時間

などが健康障害に及ぼす影響についての説明であった。

具体的な障害には、目や肩などの肉体的なものと、精神的なものがある。どういふ場合に障害が起きるのかについては、個人的な差も大きいので実際に作業を行う場合には、個々の人が最適と思える状態に調整して行うことが重要である。また、そのための人的あるいは物的、環境の整備が必要であると話された。健康障害を防ぐためには、普段のちょっとした注意と明るい職場づくりが重要なようである。

次に、大学図書館とアメニティと題された富江氏の講演は、アメニティについて、人間

の五感により感じとれる快適さであるとされ、この概念を都市計画などで考えるならば、水や道路等の安全性のレベル、上下水道等の保健性のレベル、そして利便性・合理性・機能性などの基盤的レベルがあり、その次の段階が快適性のレベルであると話された。そしてアメニティとは、特定の性格や物質をいうのではなく、複数のファクターがあるなかで、総体として感じとれる「感じのよさ」という概念であるので、これを実現することは容易でない。

図書館における快適性には、①満足なサービスが受けられるという機能的なもの、②空間的なわかり易さや使いやすさ、③温・湿度や明暗などの生理的なものなどがあり、それぞれの留意点について事例をあげながら解説された。

また、米国の大学の空間の設計例についてスライドを使って説明され、機能的な面ばかり強調された日本の図書館との根本的な違いを感じる内容であった。

今回の研修会には、業務多忙の中、学内外から多数の参加者を得て盛会であった。

(総合研修委員会)

第49回東北地区大学図書館協議会総会

標記総会は、平成6年9月21日～22日の両日、東北薬科大学附属図書館を当番館としてホテル仙台ガーデンパレスを会場に加盟館59館から45館84名の参加を得て開催された。

当番館東北薬科大学附属図書館広井副館長の司会により開会され、東北薬科大学附属図書館立木館長の開会の挨拶、高柳学長の歓迎の挨拶、常任幹事館東北大学菊地館長の挨拶があり、議事に入った。

本総会では、永年勤続表彰について、元弘前大学附属図書館医学部分館成田誠一氏、元宮城教育大学附属図書館阿部壽雄氏、元山形大学附属図書館赤星美枝子氏、同医学部分館小笠原要蔵氏、元東北大学附属図書館田代寛氏、同庄子博氏、同医学分館佐藤孝子氏の七氏に対し、永年にわたる図書館活動ならびに本協議会への貢献を賛え、常任幹事館長より所属図書館長を介して退職時に表彰状と記念品の伝達が行われた旨の報告があった。

総会における主な協議事項、並びに各部会での協議内容は以下のとおりである。

(1) 東北地区大学図書館協議会会則の改正について

前年の第48回総会において、平成6年度から現在の会費10,000円から15,000円に値上げすることが承認されたことにともない、本会会則第九条が原案どおり改正された。

(2) 当協議会主催の研修会の充実について

東北大学から提案理由の説明があり、総会

での協議のほか、国立、公立、私立の各部会でも協議されたが、今年度の一本化は時期尚早である。従って、平成6年度は、従来どおり各部会毎に開催し、来年の総会で再度協議することになった。

(3) 学術情報センター「学術雑誌目次速報データベース」形成事業への参加について

山形大学から提案理由の説明があり、これに対し各大学での取組み方と進捗状況が報告されたが、その中で新規のデータは入力しているが20年以前の分は入力していないので、これらを入力する方策について模索するとともに、データベース入力に関する説明会が翌月予定されているので、その場で十分な意見の交換を行って欲しい旨の要望があった。

以上のほか、「UNIX版図書館システムへの対応について」、「学習図書館機能の充実について」、「目録データの遡及入力について」、「学内LANの有効利用と情報処理センターとの協力について」及び「研修会のあり方について」等、各大学図書館が直面している課題について、幅広く情報交換が行われた。

本総会における記念講演は、木皿憲佐東北薬科大学教授により『痛みと鎮痛薬について』と題して行われ、参加者一同大きな感銘を受けた。

次回総会は、秋田経済法科大学が当番館として開催することとなった。

国立大学図書館協議会理事会（平成6年度第3回）

国立大学図書館協議会理事会は、平成6年10月26日～27日の両日、本学附属図書館を会場に22大学から55名が参加して開催された。

近藤禧禎男協議会事務局長の開会の辞に続いて、開原成允協議会長の挨拶があり、議事に入った。

本理事会では、報告事項に続き協議に入った。理事会における協議事項は、次のとおりである。(1)第42回総会について、(2)第41回総会の理事会付託事項について、(3)平成7年度

事業計画について、(4)科学研究費補助金の申請について、(5)その他。

理事会に先立って、文献複写に係る著作権問題特別委員会、協議会賞受賞者選考委員会、図書館情報システム特別委員会および常務理事会も併せ開催され、熱心な協議が続けられるなか成功裡に終了した。

理事会終了後、本学の貴重図書、設置間もない電動集密書架の見学も実施され大きな関心を集めた。

第7回国立大学図書館協議会シンポジウム（東地区）

第7回国立大学図書館協議会シンポジウム（東地区）は、平成6年12月7日～8日の両日、本学附属図書館を会場に35大学から50名、特別参加8名が参加して開催された。

本シンポジウムは、「ネットワークと図書館情報～利用者の期待にどのように応えるか～」をテーマとして、大学図書館の直面する諸々の課題について2日間にわたり討議された。

第1日目には、「次期電算化システム第1年次報告を作成して」と題して、学術情報センター管理部研修課長 小西和信氏の基調報告があり、「ネットワークをベースにした、これからの図書館情報システム」と題して株式会社リコー・ソフトウェア事業部長 國井秀子氏の特別講演が行われた。また、テーマ

I「ネットワークを利用した図書館サービス及び業務」として、三氏から事例報告がなされた。これらについて活発な質疑応答が交わされた。

第2日目には、テーマII「図書館情報システムのワークステーション化～その展望と課題～」として、三氏の事例報告があり、これについて活発な質疑応答が交わされた。このあと、全体会議、総まとめでしめくくり、2日間にわたるシンポジウムは大きな成果を得て閉会した。

なお、討議の合間をぬって参加者に次世代の情報システムに関するデモンストレーションが実施されるとともに、本学の貴重図書、電動集密書架の見学なども行われ大きな関心を集めた。



人 事 異 動

平成6年12月31日現在

発令年月日	旧 官 職	氏 名	新 官 職	備 考
6.10.31	事務補佐員（医学分館運用掛）	山 本 圭 一	事務補佐員（医学分館運用掛） 附属図書館長	辞 職
6.11.28		佐々木 亮		採 用
6.12.1	附属図書館長	菊 地 和 聖		任期満了
6.12.31	事務補佐員（医学分館運用掛）	須 藤 和 美		併 任 辞 職

会 議

◎学 内

6.11.22 平成6年度第2回附属図書館商議会

○協議事項

(1) 附属図書館の長期計画について

○報告事項

(1) 各分館からの報告

(2) 平成6年度図書館運営費（共通経費）について

(3) 平成6年度図書館資料費の配分について

(4) 第41回国立大学図書館協議会総会について

(5) 第49回東北地区大学図書館協議会総会について

(6) 第68次国立七大学図書館協議会について

(7) 平成6年度国立大学図書館協議会理事会等について

(8) その他

◎学 外

6.12.7～8 第7回国立大学図書館協議会シンポジウム（東地区）（於：東北大学）

編 集 後 記

今年度の半ばからは、大きな行事に見舞われ通しだったように思われます。すなわち、10月には平成6年度国立大学図書館協議会理事会等、11月には附属図書館（本館）書庫改修・環境整備記念事業、ザンクト・ガレン展示会、12月には第7回国立大学図書館協議会シンポジウム（東地区）が本学を会場に開催されました。

なかでも、附属図書館（本館）書庫改修・環境整備記念事業の一環として東北大学附属図書館所蔵貴重図書公開展示会が開催されました。これは、時を同じくして催された近くの仙台市立博物館における国宝法隆寺展と相まって学内はもとより一般市民の方々にも大きな反響を呼びました。

このような慌ただしい状況のなか、菊地前館長の後を受けて小山新館長を迎えることになりました。新館長のもと益々充実した図書館を目指して、館員一同心を新たに夫々の仕事に携わりたいと思います。

前述の諸々の行事に従事し、繁忙を極めながらの寄稿をいただいた方々に紙面を借りて心からお礼を申し上げます。本号の編集作業もついつい遅れがちとなり、読者の方々にご迷惑を掛けているのではないかと気を揉んでいるところです。

次号は、生涯学習と大学図書館の役割を特集する予定です。読者のご期待に応えられればと思います。
(T)

東北大学附属図書館報「木遣子」 第19巻第3号（通巻69号）発行日 平成6年12月31日

発行人 高橋 裕 広報委員長 伊藤則男

発行所 東北大学附属図書館 仙台市青葉区川内 電話 代表 222-1800 (2440)